

東京国際芸術祭 + パーピカン・センター (UK) + イスラーム美術館 (クウェート) 国際共同製作

スレイマン・アルバッサム・シアター (クウェート)

世界初演 『カリラ・ワ・ディムナー王子たちの鏡』

英語上演・日本語字幕付

< プレスリリース: 2005年1月 >

主 催: NPO 法人アートネットワーク・ジャパン


共 催:  国際交流基金

特別協賛:  アサヒビール株式会社

協 賛: SHI/EIDO / トヨタ自動車株式会社 / **Panasonic**

助 成:  アサヒビール芸術文化財団

後 援: クウェート大使館

 平成17年度文化庁国際芸術交流支援事業



2006年3月10日(金) - 16日(木)

にしすがも創造舎特設劇場

お 問 合 せ

東京国際芸術祭 (TIF)

TEL. 03-5961-5202/ FAX. 03-5961-5207

tif@anj.or.jp

はじめに - 東京国際芸術祭 中東シリーズについて

これまで東京国際芸術祭では、国際交流基金との共催のもと、2004 年から継続して中東アラブ世界(クウェート、レバノン、パレスチナ、チュニジア)の演劇作品を世界に先駆けて紹介し、さらにカンパニーとの直接的な共同製作体制によって新しい作品を世に送り出してきました。これらの作品はその後世界の劇場や演劇祭へ招待され、中東地域の特殊な政治・社会状況を反映した批評性の高い作品として、世界の演劇界から高い評価を獲得してきました。この反響の大きさのため、当初 3 年を予定していた同シリーズはさらに 2 年間延長される予定です。

今回で第 3 回目となる中東シリーズは、東京国際芸術祭 04 における『アル・ハムレット・サミット』公演で日本の演劇界に衝撃を与えたスレイマン・アルバッサムが、新作『カリラ・ワ・ディムナ - 王子たちの鏡』を携えて再来日します。またイスラエルからは今世界でもっとも注目を集めている若手振付家ヤスミン・ゴデールの話作『ストロベリークリームと火薬』を招聘。国際政治のさまざまな矛盾が凝縮され人々が翻弄され続ける「混迷の中東」において、アートは何をどのように表象し、社会の中に顕在化させることが可能なのか。この大きな問いに果敢に挑み続けるアーティストの批評性と志の高さに、私たちは最大限の敬意を払いながら、共に作品を作り出すことで、中東シリーズのさらなる発展を目指しています。

TIF 中東シリーズの歩み

TIF04[クウェート]	『アル・ハムレット・サミット』【世界初演】 スレイマン・アルバッサム・シアター
[レバノン]	『BIOKHRAPHIA-ピオハラフィア』 ラビア・ムルエ&リナ・サーネー
[パレスチナ]	『アライブ・フロム・パレスチア - 占領下の物語』 アルカサバ・シアター
TIF05[パレスチナ]	『壁 - 占領下の物語 II』【世界初演】 アルカサバ・シアター
[チュニジア]	『ジュヌン - 狂気』 ファミリア・プロダクション

アラブ・イスラーム世界を表象し続ける若き演出家 S.アルバッサム、待望の再来日

今回東京国際芸術祭 2006 で世界初演される『カリラ・ワ・ディムナ - 王子たちの鏡』の脚本家・演出家のスレイマン・アルバッサムは、現在クウェートを拠点に活動する新進気鋭の若手演出家・劇作家。クウェート人の父とイギリス人の母を持つアルバッサムは、アラブと西洋というふたつのアイデンティティを戯曲のダイアログとして展開し、現在の政治を鋭く批判する知的でスタイリッシュな演出で知られています。1994 年エジンバラ大学修士課程を終了後、'96 年劇団ザウムを旗揚げ。前作の『アル・ハムレット・サミット』ではシェイクスピアの「ハムレット」を現代のアラブ社会に置き換え、鮮烈な政治劇として描きなおしました。2002 年エジンバラ・フリンジフェスティバルや'02 年カイロ国際実験演劇祭で最高賞を受賞。'04 年には東京国際芸術祭との共同製作でアラブ人キャストによるアラビア語バージョンを発表、東京での世界初演を経て、イギリス、ポーランド、韓国、シンガポールなどのフェスティバルや劇場で公演を重ね、世界中から絶賛を受けました。現在もクウェートを拠点に、アラブ・イスラーム世界が直面する諸問題を演劇によって表象し顕在化させるべく活動を続けています。

作品「カリラ・ワ・ディムナ - 王子たちの鏡」

舞台はアッバース朝創世記のバグダッド。
千年の時を経て、中世イスラームの寓話「カリラ・ワ・ディムナ」が、
現在の中東・アラブ世界の鏡面として蘇える…

「カリラ・ワ・ディムナ」は、アラブ世界で現代も広く読み継がれている動物寓話。この物語をペルシア語からアラビア語に翻訳した実在の作家イブヌル・ムカッファイの生きた悲劇を通じて、現在アラブ世界に生きる芸術家や知識人が直面する問題が鋭く投射されていきます。

スレイマン・アルバッサームならではの洗練された舞台空間を美しいライブ演奏が満たし、詩的で暗示的なテキストが乱反射する…そこにはいにしへのバグダッドから、戦禍の混乱が続く現在のバグダッドとアラブ世界が映し出され、シェイクスピアをも彷彿とさせる歴史劇の中に、帝国と権力を巡る諸問題が浮かび上がることでしょう。



イスラーム帝国の夜明けから浮かび上がる、現在のバグダッド

スレイマン・アルバッサームが新作の舞台に選んだのは、アッバース朝誕生の時代、8世紀中葉のイスラーム世界。

アッバース朝(750年～1258年)は「科学、数学、文学などが花開いたイスラーム文化の黄金時代」として知られ、首都バグダッドは人口100万人を有する世界最大級の都市に成長、また第5代カリフ・ハールーン・アッラシードの時代には、日本人にも馴染み深い「アラビアン・ナイト」に象徴されるイスラーム文化の絶頂期を迎え、まさにイスラーム帝国の栄華は頂点を極めました。「イスラーム教徒であれば誰でも平等に支配される」という統治システムのもと、急速にイスラーム化が進行、イスラーム帝国を巨大化する原動力となりました。

しかしこの舞台で描かれるアッバース朝の創世記は、ウマイヤ朝からアッバース朝への変動期で、まだ定まらぬ権力の座をめぐり、指導者たちが血で血を洗う闘争を繰り広げていた革命の時代。劇中でも、初代カリフ、アルサッファーフ、2代カリフ、アルマンスール、アッバース革命指導者アブー・ムスリムなど、アッバース朝創世記の歴史をつくりあげた統治者による血なまぐさい権力闘争が、史実に基づいて描かれていきます。現在のバグダッドをクウェートから見つめ続ける劇作家・演出家アルバッ

サームは、どのようにこの 8 世紀の史実から現在のバグダッドを顕在化させるのか。シェイクスピアをも髣髴とさせる錯綜した歴史劇の中で、現在の中東をも覆い尽くす権力と帝国を巡る諸問題が浮かび上がってくることでしょう。

ペンを持つ人間の悲劇

主人公ムカッファイは、動物寓話「カリラ・ワ・ディムナ」を中世ペルシア語からアラビア語へと翻訳した作家として歴史に名をとどめた実在の人物です。ペルシア出身で、もともとはウマイヤ朝支持者であったムカッファイは、その叡智と野心によってアッバース朝の宮廷で書記官として飛躍的な出世を果たし、アッバース朝革命に深く関与したと伝えられています。正義と知恵を伝えるべく、武器ではなくペンをもって時代を駆け抜けた文人ムカッファイ。しかし、為政者に叡智を授けるための物語「カリラ・ワ・ディムナ」を権力者に曲解され、36 歳の若さで無残な死を遂げることになります。理性や愛を信じる文人が、権力の差し向けた暴力によって抹殺されていったこの史実は、現代の文人アルバッサームの筆でどのように現代に蘇るのでしょうか。そこでは、今日のアラブ世界に生きる作家や思索家が直面している問題が鋭く投影されていくことでしょう。

初期アッバース朝文学の傑作を借りて描く現代の寓話

寓話集「カリラ・ワ・ディムナ」は、古代インドにおいてサンスクリット語で書かれた動物寓話「パンチャントラ」に起源をもち、作家ムカッファイによって中世ペルシア語からアラビア語へと翻訳されました。カリラとディムナという 2 匹の山犬の名を冠したこの寓話は、人々に生きるための知恵を授ける宝庫として現在も広くアラブ文化の中に根付いています。また、文学的観点からも、それまでのアラブ文学の韻文に対し、初めて散文で書かれた初期アッバース朝文学の傑作としても知られています。

アルバッサームの現代版『カリラ・ワ・ディムナ - 王子たちの鏡』の中でも、ムカッファイが書いた『カリラ・ワ・ディムナ - 王子たちの鏡』に登場する牛とライオンを巡る寓話が劇中劇として挿入され、物語は複雑な入れ子構造を呈し始めます。劇中劇の寓話が主人公ムカッファイの人生を暗示し、ムカッファイの人生がさらに「現在の寓話」として機能する - 。この二重構造の中は、現在も混迷の続くバグダッドや中東社会を映し出す鏡面として、我々の前に多くの問題を提起する装置となることでしょう。



劇中劇「カリラ・ワ・ディムナ」の舞台

世界初演：日本、英国、クウェートによる国際共同プロデュース

『カリラ・ワ・ディムナ - 王子たちの鏡王子たちの鏡』は、東京国際芸術祭、バービカン・センター（ロンドン）、イスラーム美術館（クウェート）による共同プロデュースで実現した待望の新作で、日本が世界初演となります。西洋・アラブ世界の間には双方向のダイアログの展開を目指すアルパッサムは、前作の『アル・ハムレット・サミット』同様、英語バージョン、アラビア語バージョンをそれぞれ制作する予定ですが、今回は英国人俳優・スタッフによる英語バージョンの公演となります。

ロンドンの演劇界でキャリアを積む実力派の俳優人に加え、今回のために集められたクリエイティブ・チームにも注目が集まります。舞台美術・映像には、ロンドンで活躍するデザイナー、ジュリア・バーズレーを起用。映像を駆使した洗練された舞台が戦火に包まれるバグダッドを映し出します。また音楽は前回の『アル・ハムレット・サミット』で大好評を博したアルフレッド・ジェノベジとルイス・ジブソンによるライブ演奏。ムカッファイの悲劇をたどるように、美しくも張り詰めた音楽が舞台を満たします。

2006年1月下旬よりロンドンで稽古を開始。1ヶ月のロンドン稽古を経て、カンパニーはクウェートに移動、プレビュー公演を行ってから、東京での世界初演にのぞみます。また京都公演も敢行。さらに中東アラブ諸国ツアー（アブダビ、バーレーン、カタール、レバノン）、そして5月にはバービカン・センターでの2週間にわたるロンドン公演を経て、イギリス各地を巡回します。まさにグローバル時代の世界を駆け抜ける新作『カリラ・ワ・ディムナ - 王子たちの鏡』に、世界の注目が集まっています。



* バービカン・センター：ロンドンにある演劇・ダンス・音楽・美術など多ジャンルにわたる大規模な複合アートセンター。

* イスラーム美術館：イスラーム美術の世界有数のコレクションを誇るクウェート王立美術館。

『カリラ・ワ・ディムナ』制作・公演スケジュール

2005年5月：	リーディング・ワークショップ（ロンドン） リーディング・ワークショップ（クウェート）
9月：	舞台美術・音楽の制作開始
2006年1月下旬 - 2月中旬：	稽古開始（ロンドン）
2月下旬：	プレビュー公演（クウェート）
3月10日～16日：	東京公演・世界初演（東京国際芸術祭 06）
3月19日：	京都公演（京都造形大学 Studio21）
3月下旬～4月：	アラブ諸国ツアー（アブダビ、バーレーン、カタール、レバノン）
5月10日～27日：	ロンドン公演（バービカン・センター、Barbicanbite06）
5月27日～6月27日：	イギリス地方ツアー

アルバッサーム版「カリラ・ワ・ディムナ」——ペンで剣に抗う者たちの鏡

エグリントンみか(英国演劇 / 批評)

スレイマン・アルバッサームが舞台化する、カリラとディムナという二匹の山犬の名を冠したアラブの動物寓話は、ギリシア起源のイソップ物語と同様に『今昔物語』の材源であるにも拘らず、日本ではあまり知られていない。ましてインドで編まれ、ペルシアに伝わった『パンチャタントラ』を、アラビア語に翻訳 / 翻案した『カリラ・ワ・ディムナ - 王子たちの鏡』の作者アブダッラー・ブヌル・ムカッファイ＝「神の僕にして萎縮した者の息子」なる人物に及んでは、まるで知られていないに等しい。

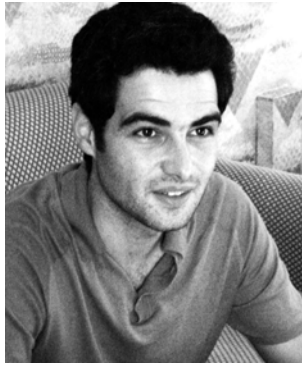
だが君臣論として記されたこの寓話は、今も中東文化圏の生活の中に生きる知恵として息づいている。そしてペルシアのマワーリー(改宗してムスリムになった非アラブ人)、あるいはジンディーク(表向きムスリムでありながら、ゾロアスター教やマニ教を信仰する人)とされる異民族、「異教徒」のムカッファイが、華々しい出世と対極の禍々しい拷問によって三〇代半ばで散るまでのドラマティックな生き様は、ムハンマドの血を引く一族が互いの血を血で洗ったアッバース朝創世期の恐怖政治と共に、歴史として記憶されている。

ムカッファイの生涯については謎が多く、その著作と絡めて後世の政治的、宗教的、言語的要求によって加筆、修正、削除、簡略化さらには神格化と様々な変容を被ってきたために推測の域を出ないが、ウマイヤ朝治世下の七二〇年頃、旧ペルシア帝国ササーン朝貴族の家に生まれたと伝えられている。地租徴税官をしていた父は、公金横領の疑いで拷問にかけられて手が萎えていた。父の異名と同時に片手を落とされる悲運をも選び取ったかのムカッファイは、幼い時から言語の才能を発揮し、ウマイヤ朝宮廷でも名文家として重用されている。七五〇年のアッバース革命後、為政者の在り様をより根底から変革すべく新体制に乗り込み、動物の仮面と言葉を巧みに操って書記官、顧問官とカリフに進言する地位を築きながら、無残にも処刑されている。

この歴史的人物と古典的寓話を共鏡として照らし合わせながら、歴史 / 物語のさらなる書き換えに挑むアルバッサームは、劇中劇として原作『カリラ・ワ・ディムナ』の白眉である「ライオンと牛」に纏わる寓話中寓話を引用し、ムカッファイの劇的人生をメタシアトリカルに描き出す。ある話に別の話が重層的に入り込むインド—ペルシアの枠物語の構造とコーランを誇るアラブ詩の伝統を融合させた散文詩は、君主の鑑ではなくその獣性と作者自身の悲運を仄めかす鏡となり、物語 / 芝居 / 運命 / 政治 / 歴史は、複雑な入れ子構造を呈し始める。——狡猾な山犬ディムナがライオンの寵愛を得た牛シャンザバに嫉妬し、牛はライオンに背いているとの偽りの進言をして、牛を殺させるという寓話は、権力欲に憑かれたアルマンスールの取り巻きによって曲解され、ムカッファイの意図を超えたおぞましい結末を招いてしまうのだ。

血に塗れた政治と宗教の渦中に巻き込まれ、自己矛盾に苦しみながらなお正義と神の愛を求めた「異端者」は、ペン先で己の喉元を突いたかの皮肉な死を迎える。古都バグダッドの興隆が昨今の「再建」と鏡像関係にある現代版『カリラ・ワ・ディムナ - 王子たちの鏡』は、シニシズムには陥らずに現実を鋭く切る批評眼を備えた現在進行形の寓話となっている。砕け散った「王子たちの鏡」は、アルバッサームの手によって組み直され、ペンで剣に抗う者たちをより鮮明に照らし出すのだから。

劇作家・演出家:スレイマン・アルバッサーム Sulayman Al-Bassam



現在クウェートを拠点に活躍する気鋭の劇作家・演出家。

1972年、クウェート人の父、イギリス人の母の間にクウェートで生まれる。幼少期をクウェートで過ごし、中等教育以上をイギリスで受けた彼は、アラブと西洋という二つのアイデンティティをもち、そのダイアローグを自らの戯曲や演出の中で強く展開している。

アルバッサームは94年にエジンバラ大学修士課程を修了後、ロンドンのヤング・ビック、ゲートシアターなどで演出助手としての研鑽を積み、96年劇団ザウムをイギリスで旗揚げする。新しい演劇形式の創造を目指した劇団ザウムは、演劇、音楽、ビジュアルアートといった複数のジャンルのアーティストが共同で作品の創作するスタイルをとり、フランスとイギリスを中心に活動を展開。

2001年、湾岸戦争イラク開放記念事業の一環としてクウェート政府から委嘱された作品『ハムレット・イン・クウェート』を発表。その後、9.11に強い衝撃を受けたアルバッサームは、同作品をさらに発展させ『アル・ハムレット・サミット』を制作、01年10月カルタゴ演劇祭(チュニジア)、02年8月エジンバラ・フリンジフェスティバル(イギリス)、02年9月カイロ国際実験演劇祭で立て続けに発表し、いずれも最高賞を獲得、一躍世界の演劇界の注目を集めた。その後02年より故郷クウェートに拠点を移し、政治的な混迷の続く中東で、アラブ世界における芸術交流と演劇のネットワーク構築を目指した精力的な活動を展開している。

2004年2月、東京国際芸術祭との国際共同制作により、アラブ人の俳優によるアラビア語バージョン『アル・ハムレット・サミット』を発表、政治的メッセージの強い鮮烈でスタイリッシュな舞台は、日本や世界の演劇界に大きな衝撃を持って迎えられた。また同作品はリバーサイド・スタジオ(イギリス)、ソウル舞台芸術祭(韓国)、シンガポール・アーツフェスティバル等にも招聘され、アルバッサームは一躍世界の演劇界で大きな注目を集める存在となった。

今回の『カリラ・ワ・ディムナ - 王子たちの鏡』東京公演以降も、アラブ諸国(クウェート、バーレーン、アラブ首長国連邦、カタール、レバノン)でのツアーに続き、06年5月にはロンドンのバービカン・センターでの連続16公演が決定。また07年にはロンドンのロイヤル・シェイクスピア・カンパニー(RSC)にて『リチャード3世』の翻案劇『バグダッド・リチャード』の演出が決定しているなど、イギリスの演劇界でも着実な評価を得ながら躍進を続けている。

スレイマン・アルバッサーム(作・演出)のことば

この芝居を通して私が伝えようとした今日的な問題はいくつもあるが、私が依拠する地域(アラブ世界)において意義を持つだけでなく、地域性を越えるものとなることを願っている。

アラブとイスラームの歴史にまつわるこの芝居によって、中東地域に異文化間のダイアローグをもたらす、他者の目を通じて自己をよりの確に近づけるようにする「知的燃料」という一捻りを加えることを願っている。

公演概要

スタッフ

作・演出:	スレイマン・アルバッサム	Sulayman Al-Bassam
美術・衣装・映像デザイン:	ジュリア・バーズレー	Julia Bardsley
照明デザイン:	シャイン・ヤブロエーン	Chahine Yavroyan
作曲・演奏:	ルイス・ジブゾン	Lewis Gibson
演奏:	アルフレッド・ジェノベジ	Alfredo Genovesi
制作・技術監督:	ドミニク・マーティン	Dominic Martin
舞台監督・カンパニーマネージャー:	ヴィッキー・ベリー	Vicky Berry
演出助手:	ナイジェル・バレット	Nigel Barrett
デザイン助手・マスク制作:	フィリッパ・ヴァン・ヴェリー	Philippa Van Welie
制作コーディネーター:	レベッカ・キリガリーフ	Rebecca Kilgarriff
スクリプト編集:	ジョージナ・ヴァン・ヴェリー	Georgina Van Welie

キャスト

アジア:	ミシェル・ボナール	Michelle Bonnard
スファーン:	ナイジェル・バレット	Nigel Barrett
ジャッカル:	ベン・ボアマン	Ben Boorman
ムカッフアイ:	アレックス・カーン	Alex Caan
アブ・アイユープ:	キャミー・ダーヴィッシュ	Kammy Darweish
アルマンスール:	サイモン・ケイン	Simon Kane
アブー・ムスリム、ピン・アリー:	ニコラス・カーン	Nicholas Khan
アブラッシュ、ワリーバ、アルサッファーフ:	マシュー・パリッシュ	Matthew Parish
バシャーラ、ラビー:	ファズ・シガース	Faz Singateh

日本側スタッフ

.....

技術監督:	草加叔也(空間創造研究所)
舞台監督:	小林裕二
照明:	小笠原純 (ファクター)
音響:	相川晶 (サウンド・ウィーズ)
翻訳:	エグリントンみか(英国演劇・批評)
制作:	相馬千秋(NPO 法人アートネットワーク・ジャパン)

公演日： 3月10日(金)―3月16日(木)

10日(金)	11日(土)	12日(日)	13日(月)	14日(火)	15日(水)	16日(木)
	17:00	17:00	休演日			
19:00				19:00	19:00	19:00

終演後、ポスト・パフォーマンス・トークあり 12日(日)ゲスト:宮沢章夫(劇作家・演出家)

当日券発売は開演の1時間前 / 開場は開演の30分前

会場： にしすがも創造舎特設劇場

チケット： 発売:1月11日(水)

料金： [全席指定・税込] 一般 4,000円 学生席 2,000席(当日要学生証提示)

チケット取扱： チケットぴあ:0570-02-9999/9966(Pコード 366-205) <http://t.pia.co.jp>

e+ (イープラス): <http://eee.eplus.co.jp> (パソコン & 携帯)

東京国際芸術祭(TIF):03-5961-5202 <http://tif.anj.or.jp>

お問合せ： 東京国際芸術祭(TIF) TEL 03-5961-5202 tif@anj.or.jp <http://anj.or.jp>

京都公演

日時:3月19日(日)16:00開演 *開場は開演の30分前

会場:京都芸術劇場 studio21(京都造形芸術大学内)

主催・お問合せ:京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター

TEL.075-791-9437 <http://www.k-pac.org/>